書評

岩田昌征

『社会主義の経済システム』

新評論　1975. 12　iv＋366ページ

今日では，比較体制論とか社会主義経済論は，きわめてアクチュアルな国民的選択とかかわる領域となってきている。この本も，著者が文中でしばしばのべているように，すぐれて現実的かつ主体的なモチーフにささえられて書かれたものである。東欧に数回，長期にわたって滞在し，とくにユーゴースラヴィアについて理論的にも現実的にも深く知る点では，わが国ではこの著者より右に出る人はないであろう。その著者が前著2作につづき，この数年間に書いた論文に加筆・集成してまとめた「現代社会主義経済体制論序説」(5ページ)がこの本である。

一般に，“社会主義とは何か”ということがしばしば論じられ，その場合，人によってその概念像にかなりの違いがみられることが多い。しかし，実はこのことの中に，社会主義という体制の一つの特徴がある。それは，経済体制としての社会主義が封建制度とか資本主義とちがって，意識的に創り出される社会経済システムであるということに根ざしている。そこではちょうど，人間がある目論見，設計，イメージに沿って生産物を作り出す場合と，一面で，似た関連が現われる。したがってそこに社会主義像の多様性ということも現われる。しかし多様性といっても無限定性があるわけではない。そこでは多くの問題が一つ一つ歴史の現実の中から提起されたり，また部分的に解明されたりしてきている。たとえば，かつては社会主義といえばソ連の現実だけが唯一つのモデルだと考えられたような時代もあった。しかし今日では，中央集権的な，党中央と政府の権力が万能であるような集権的社会主義経済体制によって，生産と消費が発達し社会関係の多様化した社会を，運営できると考える人は——ごく一部の人を除いては——ほとんどいない。発達した社会における情報処理や利害調整を中央だけで集中処理することは不可能だからである。問題は，どのような形で集権制へのアンチテーゼと発展を創り出してゆくか，いいかえると広義の民主化と自律性のあり方にかかってきている。しかも，このことは単に社会主義経済の効率的運営という管理技術的観点から必要なのではない。そこでは，社会主義の本質からして，体制を真に働く人々による，働く人々のためのものとし，「自由な，働く人々のアソシエーション」を創ることがいかにして可能かということにつながっている。とくに，今日の発達した社会にあっては，制約条件の多様性，人々の価値感の多様性の中で，いわゆる利害調整の問題が全面に出てきている。その条件下で人間の解放を求めてゆくコースとして民主的な社会主義のシステム設計が非常に切実な課題として模索されている。この本もそのような問題領域に挑むものとして書かれている。

まず，第1部は「視点と方法」を論じている。そこでは，社会主義諸国の現実をみる際に，その政治経済を領導する理念像を扱う理念論，理念を実現する仕組みとしての制度を扱う制度論，それらが現実の社会的再生産を包摂する場で形成される生産関係とその機能法則についての経済理論的分析の3視点から所有，管理，分配，分業，決定の5つを基軸に(83～87ページ)，照射せねばならないという著者年来の主張が説かれている。

第2部「テクノクラート型社会主義」では，まず第4章で主としてソ連の数理経済学派の提唱する経済改革としての「最適計画化・管理システム」のモデルについて紹介し，それが結局は，中央決定される目的関数としての国民経済的最適性基準と個別部門の目的関数としての局所的最適性基準を「両者の連結が中央にとって好ましい効果をもつような」(159ページ)形で連結する刺激オペレーターとフィードバック・システムの工夫であるということが説明される。著者はこのモデルについて「物質的刺激システムに組みこまれた形においてのみ人間を……理解する人間観・労働観」があり，それが「官僚主義批判の欠如」に結びつくと批判しつつ(150ページ)，これらについての「吟味」を「他日の課題」に残している(162ページ)。

著者の分析力量をしめしているのは第5章である。そこでは，中央計画経済のもとでの計画作成にあたって中央当局と局所的単位(企業など)との間の反復的往復作業により計画作成されるところの，いわゆる「計画の分権化」モデルについて分析される。一般にそこではダンツィヒ・ヴォルフの分解原理を援用して全体計画をいくつかの部分計画に分割し，かつこれらをつなぐ評価パラメーターの調整により両者の調整を行う。この際にも，ソ連数理派のバグリノフスキーらのモデルにみられるように，事実上は，局所的最適解を単にコンシステントなパラメーターをみつけるための道具とするようなあり方がみられる。これでは「局所的経済単位の経済全体に対する役割は，計算作業の一部を引き受けるだけであり」(174ページ)，社会経済的な意味あいでの分権化になっ

ていない。著者はこのように指摘したのち，そのタイプを「厳格な二層性モデル」とよぶ。これにたいし，ハンガリーのコルナイが提起し実験もされたモデルでは，局所的単位の計画作成において，共通資源の利用制限，局所的単位の目的関数におけるパラメーターについて自主的なヴァリアント選択が試みられる。これが中央との往復途中経過における複数個の部分計画の混合化を媒介にし，計画作成の「イタレーションの軌跡が，実は経済単位内部と相互間の利害対立を妥協せしめる社会的過程の反映となっている」(178ページ)ことを明らかにして，著者はこのタイプを「寛容な二層性モデル」とよぶ。このようにして，著者は計画分権化過程における技術的側面と社会経済的側面との違いおよびその連関も明確にしている。

ついで著者は，ユーゴスラヴィア，ハンガリーなどにみられる市場導入に関連して，市場モデルについても，2, 3の問題に触れている。とくに，前述した計画分権化モデルに財の集計問題を導入してより現実に近づけたモデルを分析してみれば，“主要財の価格を固定価格とし，非主要財の価格を固定集計価格の許容する範囲で動かす”タイプ(194ページ)の価格制のもとでの市場導入が一つの必然として現われることを，まことに手際よく分析してみせている。

第3部「自主管理型社会主義」では，著者がこれまでに「民権主義的社会主義」とよんだものの典型とされるユーゴースラヴィアの制度と現実について3章に分けて分析される。著者がしばしばのべるように，ユーゴースラヴィアの特徴は「労働者自主管理と市場導入の結合」にあるが，この国の場合にはこの前者の導入から始まっていることに根本がある。1948年に，伝統的な集権的・官僚行政的中央計画経済への批判として「人民大衆のますますなる自治」(カルデリ)をめざす動きが顕在化し，労働者管理法の制定(50年)。この自主管理を実質化しつつ再生産を持続する経済システムとして，より適合的であるということから市場導入に向い，企業の自律性を導入する新計画法(51年)。次いで58年の共産主義者同盟綱領，63年の新憲法において，計画の主体は特定の国家機関ではなく，企業の自主組織，コンミューン，連邦にいたる全レベルの組織における労働者であるという定着にすすむ。そして60年代後半には市場導入は投資部門にも拡張されるとともに，68年憲法修正(修正XV)により，労働者自主管理組織のあり方そのものにヴァリアントを促す「自主組織化原則」の確立と71年の新計画基本法にいたる過程がきわめて具体的に整理されている。かつ，その過程がけっして平坦ではなく，管理組織のテクノクラート的復権の危険性や市場導入における混乱の振幅をかかえて苦闘していることを如実に分析し著者の実力を如何なく示している。そして著者は，ユーゴースラヴィアの市場導入は，理念的にはハンガリーのそれに比べて「論理的次元を異にする」ところの，社会的協約にもとづく水平交渉の組織化概念(332～3ページ)を考えているが，現実には60年代後半からの市場導入拡大が「民族的利害対立の深刻化」(353ページ)という現状におされて生まれている側面をも指摘する。そしてユーゴースラヴィアの体制デザイナーが市場機構導入，労働者管理についてどれほどの経済理論的・組織論的分析を準備していたか「興味あることである」(354ページ)としめくくっている。

このようにみてくると，著者が序章でことわっているように，この本では，ユーゴースラヴィア型社会主義のモデルとしては「歪小化」されたアメリカのB. Ward型の数理モデルをとらなかったのは明らかに成功である。しかし，市場と計画の結合に関する本格的な数理経済学的モデル分析と設計の必要性が深く了解されるのである。著者もいうように計画分権化モデル(二層性モデル)と市場導入モデルとは明らかに異なる(180, 221ページ)。評者もかねがねいうように，前者は計画作成における民主性の問題であり，後者はシステム作動における自律性・弾力性の問題である。そして後者の拡大が計画に不整合をもちこむことも必然である。ここをどう把握するか。これを経済理論モデルとして明確にすることの必要性は，かつて評者の著書にたいして故岡稔教授がその書評で述べられたことである。今日，この課題は依然として果たされていない。この課題にたいして本書で示された著者の力量はおそらく今後に有力なものを期待させるであろう。

なお，ソ連のかなりデスペレートなレベルでの集権的官僚制は，世界の他の部分における社会主義革命の拡大とそれによる国際関係の変化をまたねば解決しない側面があり，そのような視野からの分析がないと解けない問題を含んでいるといえよう。

ただ，日本での道筋は，ソ連とはもちろんのこと，東ヨーロッパとも異なった道筋をたどるだろう。このことを念頭に入れて他山の石をどう生かすかに，われわれの分析課題がかかっているといえよう。　〔飯尾　要〕